

**英語の challenge と**

**日本語の「チャレンジ」**

**… ずいぶん違うんですね。**

**～ さまざまな言葉の「含み」を知って**

**英語のクオリティを高めよう ～**



**【登録中の配信スタンド】**

メルぞう

<http://mailzou.com/get.php?R=24503>

無料情報ドットコム

<http://www.muryoj.com/get.php?R=8213>

まぐぞう

[http://mag-zou.com/report\\_get.php?id=m1000017219](http://mag-zou.com/report_get.php?id=m1000017219)

**【編集者情報】**

編集者： えいいち

[the\\_lake\\_poets@yahoo.co.jp](mailto:the_lake_poets@yahoo.co.jp)

メールマガジン：

珠玉の「ワンポイント・イングリッシュ」－京都から

<http://www.mag2.com/m/0000269406.html>

## 目 次

● はじめに .....	3
■ 「challenge」と「チャレンジ」、ずいぶん違うんですね。 ....	5
■ 「当然そうなる」 will be ~ing .....	11
■ out / out of がもつ空間認識のイメージ .....	18
■ 「パーティーは7時にはじまると誤解していました」.....	22
■ 「お久しぶり」は Long time no see...? .....	28
■ 強い確信をもって「彼女に会う」と言うには .....	34
● おわりに.....	42

## ● はじめに

こんにちは。えいいち と申します。

この無料レポートを手にとって下さり、ありがとうございます。

◇ ◇ ◇

この無料レポートでは、英語のいくつかの言葉・表現について、  
言葉の持つ「含み」を、ワンポイントでご紹介していきます。  
なにかひとつ、あなたの英語にとって、収穫があると思いますよ。

この無料レポートは、私の発行するメールマガジンから、  
バックナンバーをそのまま掲載しています。

珠玉の「ワンポイント・イングリッシュ」－京都から

<http://www.mag2.com/m/0000269406.html>

(無料・購読解除も自由にできます)

このマガジン、少し趣向が変わっているんです。

・・・京都地域だけで放送されているラジオの番組に、  
「ワンポイント・イングリッシュ」のコーナーがあるんですが、  
これが、秀逸なんですね！ 鮮やかな手さばきで、  
言葉の持つ「含み」「エッセンス」といったものが、直送されてきます。  
このメールマガジンは、番組愛聴者の私が、放送の雰囲気も含めて  
作成した備忘録なんです。

放送局は、京都のFM局、αステーション。

DJは、佐藤 弘樹 さんです。

[http://fm-kyoto.jp/djprofile/profile/hiroki\\_sato/index.shtml](http://fm-kyoto.jp/djprofile/profile/hiroki_sato/index.shtml)

渋い声、思想が薫る、gentleman という表現ぴったりの方です。

## ■ 注意事項

この内容は、個人が備忘録として記録したものです。  
公式のものではありません。

従って、十分に注意しているつもりではありますが、  
万一、その内容に誤りがあった場合、その責は編集者である私にあります。

私は、佐藤弘樹さんやαステーションが大好きで、  
なるべく放送の雰囲気もお伝えしたいという気持ちがありまして、  
基本的に、放送の言葉に忠実に書き起こしています。

すこし読みにくい感じがするかもしれませんが、  
その意図をお汲みいただき、ご容赦願います。

## ■ 「challenge」と「チャレンジ」、ずいぶん違うんですね。

さて、今日も新聞でオリンピックの記事なんかを見てますとね。

あー、やっぱり、  
どんなベテランも、  
かつて金メダルを取って、金メダル獲得を当然視されているベテランも、  
あるいは、  
初めてオリンピックに出た人たちも、  
関係なく、  
結局、みんな「チャレンジャーなんだなあ～」と思わしてね。

で、今日のワンポイントは、  
この **challenge** っていう単語を扱ってみようと思うんです。

「チャレンジャー」って、  
日本語でも使いますでしょ、よく。

「この忙しい時に、こんなに休みを取るなんて、なんていうチャレンジャーだ！」  
なんていう言い方をしたり、しませんか？(笑)

で、まずは、  
**challenger** という英単語からいきましょう。

**challenger** という言葉の反対語って、お分かりですか？

これ、不思議なことで、  
「チャレンジャー」はカタカナとして定着しているのに、  
この反対語は、カタカナとして定着してないですねえ。

はい。

defender 「ディフェンダー」です。

よく「ディフェンディングチャンピオン」というような言い方は、カタカナでもするようですが、なぜか「ディフェンダー」という言葉は、定着しないようです。

ま、もしも、日本語に訳すとしたら、なんでしょう、「選手権保持者」みたいな言葉になるんでしょうかね。

で、「チャレンジ」という言葉。

実はあの、日本語の、カタカナの「チャレンジ」と、英語の challenge には、違いがあります。

で、英語からいきますと。

英語の challenge は、元々、「とがめる」という意味を持っています。

なもんですから、challenge する対象は、「人」でしかないんです。

ところが、日本語の場合は、「人、物」両方に使うんですね。

例えば、「登山にチャレンジする」とか、「あの難しい試験にチャレンジする」というような言い方、しますでしょ。

ですから、  
日本語は「人、物」両方に使うんですけど、  
英語の場合は「人」だけです。

例えば、  
「彼らが我々に野球の試合を挑んできた」

この場合、challenge してきた訳ですよ。  
ですから、  
**They challenged.**

なんですけども、  
「野球の試合を挑戦してきた」というと、  
日本語で考えると、  
**They challenged a baseball game.**  
って言いたくなりますけど、  
これは、今ご紹介した通り、言えないんですね。

「人」しか、その challenge の対象になりませんので。

**They challenged us to a baseball game.**  
これが、challenge という単語の、基本的な使い方です。

(今日の音楽 - オレンジレンジ「花」)

さて、今日の「ワンポイント・イングリッシュ」は、  
challenge なんですけども、  
曲は、ORANGE RANGE で「花」でした（笑）

「レンジ」しか、合っていないじゃないか！」

しかも

「'challenge'は'L'なのに、'Range'は'R'じゃないか！」

などなど、いろいろツッコミもありましょうが、

あの、お盆休みということで、お許し頂いて・・・

で、 challenge という単語。

先程、曲の前にご紹介した通り、

日本語は「人、物」両方使えますが、

英語は「人」だけを対象にします。

ですから、例えば、

「いろんなことにチャレンジする」という場合。

**challenge a lot of things** とは言えません。

で、こういう時にどうしたらいいかというと、

もう、challenge は、諦めてしまいましょう。

こういう時は、意味から考えて、

**try** の方がいいんですね。

「彼は、いろいろなことにチャレンジした」

**He tried a lot of things.**

これで十分、意味が通じます。

また、例えば、

ある難しい試験があつて、その試験にチャレンジすることになっている。

これも、

**I'm going to challenge the test.**

とは言えません。

**I'm going to take the test.**

という言い方で、

「チャレンジする」という含みを持たせることができます。

さて。

「自分にチャレンジする」ともいいますでしょ。

で、これがまた、悩ましいところなんですけど、

「自分にチャレンジする」のであれば、

oneself ですよ。

ま、自分であれば myself ですね。

これは「人」ですので、

challenge myself って言えそうですけど、これも変です。

例えば

「彼はいつも、自分にチャレンジしている」

**He's always challenging himself.**

これ、おかしいんですね。

あの、使わないと思います。

この場合は、

「彼はいつも自分にチャレンジしている。」

つまり、

「よりよき高みを望んで、そこに try している」と考えて、

英語の challenge と日本語の「チャレンジ」・・・ずいぶん違うんですね。  
～さまざまな言葉の「含み」を知って英語のクオリティを高めよう～

---

**He's always trying to do better.**

ぐらいの方が、英語らしいと思いますね。

こういう、日本語でもよく使う英単語は、特に注意が必要かと思います。

## ■ 「当然そうなる」 will be ~ing

昨日は、学生時代、  
中学校時代に教わる文法項目の一つ、  
「受け身」のお話でした。

受け身のお話で、かけた曲が、  
「ウ・ケミストリー」というすごいことを  
やってしまいました（笑）

今日はですね、もう一つ中学校時代に教わる、  
「進行形」っていうのをやりましょうか。

「be 動詞＋動詞 ing 形」っていうやつですね。

英語って、あの、  
他の文法項目でもそうですけど、ある意味で、  
数学の公式みたいなものを最初に覚えます。

「be 動詞と ing 形」とか、  
「be 動詞と過去分詞」というようなことですね、  
これが大原則ですよ。  
ここを崩してしまうと、元も子ありません。

ところが、生き物である「言葉」を扱うという面で、  
このステージをクリアすると、次に、  
「いや、必ずしも機械的に公式を当てはめるようにはいかないんだ」  
という段階に達するんですね。

ですから、どっちの段階でも、  
両方ともやらないと、実際には使えません。

例えば、

**be going** なんていうのを教わりますでしょ。

「家に帰る」っていう時に、

**I'm going home.**

って言いますよね。

これ、**home** は副詞ですので、**to** はいりません。

もう一つ、

**I'm going to go home.** とも言いますよね。

これ、文法的には二つ、成り立ちます。

しかし、この二つ、含みが違います。

言葉って、ちょっとした違いで、その、  
話している人の頭の中のイメージが出る場合がありますよね。

「家には帰るつもりですよ」って言った時の、

「は」が入ることによって、

「家に帰るつもりですよ」とは

全然違うメッセージが伝わりますよね。

で、我々、こういうことを、

母語では、ほぼ無意識に使い分けているんですね。

同じことは英語でもいえます。

まああの、

**I'm going to go home.**

って言うと、

go が重なっていますから、ちょっと気になりますけども、  
文法的には正しいので、言っても構いません。

これを言った人のマインドは、  
「家に帰るつもりだ、と決心しているだけです」  
と言ってるんですね、これ。

例えば誰かに  
「まあ、まだいいじゃないですか～」って引き止められたり、  
「ちょっと、悪いけどこれやって」って言われると、  
「じゃあ、ちょっと後にしようかな」  
と思うかもしれない、という含みがあります。

日本語に訳すなら、  
「家に帰るつもりです」でしょうかね。

これが、  
**I'm going to go home.**  
になるだろうと思うんです。

ところが、  
**I'm going home.**

こちらになりますと、今度は、  
「家に帰るところです」と訳すでしょうかね。

つまり、決心が固いんです。こっちのほうが。

ですから、  
「まあ、まだいいじゃないですか～」  
「いや、断固帰ります」

というような、含みの違いがあるだろうと思います。

ちなみに、

I'll go home. って言うと、

「お、よし、家に帰ろう」と、今決心したような、  
そんな含みに変わるだろうと思います。

(今日の音楽 — Elton John 「I'm going to be a teenager idol」)

エルトン・ジョンで「I'm going to be a teenager idol」という曲。

「ティーンエイジャーのアイドルになるつもりでございます」  
という、こんな曲をお聴きいただきました。

今日は、「進行形」というのをご紹介してるんですけど、  
進行形って、何パターンあると思います？

これ、6パターンあるんですね。

あの、

一番最初に教わるのが、現在進行形ですよ。

これが、時がずれると、  
過去進行形になって、未来進行形になって、  
それぞれに、完了時制がありますから、  
現在完了進行形と、過去完了進行形と、未来完了進行形。

こうあるんですけど、

まあ、これは理屈の上で成立するだけで、

実際に、使用頻度からいうと、  
現在進行形とか、過去進行形とか、  
もう一つ、未来進行形というのが、  
よく使われます。

これあの、中学校ぐらいで習うんですけど、  
「未来進行形」と「未来形」って、  
なんか、分かったような分からなかったような説明で、  
区別つかなかったんじゃないかな、と思うんですね。

現在形と、現在進行形って、区別つきますでしょ。  
また、うまい訳をしますよね。  
「～するところである、しているところだ」  
日本語からも、その違いが明確です。

一方、  
未来進行形は、先程の公式でいうなら、  
「will be ～ing」ですよ。

では、例えば、  
**I will fly to Sapporo at 2 p.m.**  
**I will be flying to Sapporo at 2 p.m.**  
この2つ、どう違うんでしょう。

will だけの方をしてみますとね。  
今、あんまりこういうのを学校で言わないみたいですけど、  
will って、  
「意志未来」っていう難しい言葉を使うんですけど、  
「～しよう」と「個人の意志が加わっている」  
という風に教わります。

**I will fly to Sapporo at 2 p.m.**

こちらは、

「2時の札幌行きの便に乗ろう」  
と言っているだけです。

で、その並びで言うなら、  
その未来進行形というのは、  
「当然そうなる」と覚えるといいと思うんです。

結果として、当然そうなる。

つまり、

**I will be flying to Sapporo at 2 p.m.**

というのは、  
当然 **be flying** になる、ということですので、

「午後2時発、札幌行きの便に乗ることになるだろう」です。  
「乗っていることになるだろう」です。

あるいは、

「午後2時の札幌行きの便で飛行中であろう」です。

これ、文脈によって、この一文だけでは、  
どっちともとれますけど。

「当然そうなる」という含みがありますから、  
「このまま何もなければ、その飛行機に乗っていることになるでしょう」  
と言っているわけです。

あの、お気づきの方いらっしゃると思いますけど、  
新幹線に乗りますと、「次の停車駅は～」っていう時に、

**We will be stopping at ～.**

って言いますでしょ。

あれ、要するに未来進行形なんです。

**We will be stopping at Kyoto.**

「このまま走っていけば、当然、次は京都駅に停まることになるでしょう」と言っているわけです。

ご参考になりましたでしょうか。

## ■ out / out of がもつ空間認識のイメージ

このところ、前置詞という、あのややこしい言葉をご紹介しております、  
in, on, to, at なんていうのをやってきました。

前も一度ご紹介しました通り、  
前置詞というのは、もうそれだけで一冊の本になるくらい、  
あの～ ややこしい事なんですけども、  
「前置詞そのものに意味がある」という風に覚えた方が、  
むしろ、前置詞というものを訳しやすいかな～ と思います。

例えば at というものを「で」と訳したりすると、

**throw the ball at me**

なんていうのをどう訳したらいいか、っていう時に  
「私で」ってなってしまうんですけど、  
はあ？ ですよ。

at には「～をめがけて」って意味がある。

「～をめがけて」というその本来の意味が、 at そのものにある。

そう考えてみると、訳をするときも、  
こなれた日本語に出来るだろうと思うんですね。

さて。

「彼は家から歩いて出て行った」と、こう言いたい場合。

**He walked out the house.**

**He walked out of the house.**

**He walked from the house.**

さて、これはそれぞれニュアンスが違います。  
1曲挟んでこの3つ、見比べていきましょう。

(今日の音楽 - サノボーン Can't get out of the mood)

暑い朝には、こういう曲も似合うかもしれませんね。  
サノボーンで Can't get out of the mood.  
「この気分から抜け出せない」

まず一番最初の  
He walked out the house.

これ、なによりまず、言いにくいですよね (笑)  
言いにくいですから、あの、何か違う違和感があります。  
これは、おかしいです。

あの、あたかも透明人間になったようなイメージの言葉ですね。

out は、  
「何かを通り抜けて外へ」という意味ですから、  
out the house は、ちょっとあり得ない。

ですから、  
「中から外へ出る」という含みで言うなら、  
out of ですね。

He walked out of the house.

**out of the house.** あるいは、  
**out of the room.**

「中から外へ」なんですね。

ところが、**out** を使うと、例えば、  
**out the door** って、これ使います。

**He walked out the door.** とは言うんです。

「彼はドアから出て行った」

**He walked out the window.**

「窓から出て行った」

これ、使うんです。

じゃ、なぜ

**walk out the door.** は言うのに、

**walk out the house.** は言わないのか。

これは、あの、ずっと、この前置詞のお話で紹介してきた通り、  
空間認識のイメージなんですね。

あの、前にご紹介しましたが、

「車に乗り込む」とは言うけれども、

「バイクに乗り込む」とはあまり言わないんですね。

それは、バイクがオープンスペースだからなんです。

車は一つのこう、空間をなしていて、その中へ入っていく。

つまり、**out of** は、

「閉じられた所から外へ出て行く」イメージなんですね。

なもんですから、「家から出る」「部屋から出る」  
その空間をそういう風に認識しています。

ところが、out は「通り抜ける」その「移動」に重きがありますから、  
例えば、「ドア」であったり「窓」であったりします。

ですから、これは両方とも「から」と訳しただけでは、う～ん、  
その違いが、分かりにくいだらうと思うんですね。

で、もう一つの from というのは、  
本来「外へ」という意味がありません。  
これもまた、「から」と訳すと誤解が生まれるんですね。

あの、そもそもは from は、「出発点」という風に言いまして、  
**He walked from the house.**  
「彼は家を出発点として、歩いていった」

なもんですから、普通は、  
**from the house.** としたら、  
後ろに to 何々 とすると、言葉の座りが良いんです。

例えば、  
**He walked from the house to the station.**  
「彼はその家から駅まで歩いていった」  
というような訳になろうかと思えます。

あの～、  
簡単に「から」といった格助詞の訳語を付けてしまうと、  
こういう細かい部分が、分かりにくいかもしれません。

## ■ 「パーティーは7時にはじまると誤解していました」

あの、英語の中で「動詞」って言われる言葉、ありますよね。

「英語は動詞の言語だ」とおっしゃる方も多いんですけど。

考えてみると、

日本語をしゃべる時って、

動詞を使わなくても意味が通じること、ありますでしょ。

ですけれども、英語の場合、

動詞を言わないと、

何を言いたいのか、何を言わんとしているかが、

通じないのですね。基本的には。

やっぱりこれは、言葉そのものの特性だと思います。

動詞というものとは仲良くした方がよいんです。

動詞は、同志っていう位ですから（笑）

さて。

特に中学生・高校生の段階で

このことをインプットしておくのと良いと思うんですけど、

単語って、特に動詞の場合、

その意味だけ覚えても、

実際に文章を作れないケースが多いんですね。

例えば、

前に一度ご紹介したのは、

help という単語だったと思うんですけど、

help っていう単語は、皆さんご存じですよ。

「助ける」とか「手伝う」っていうのがずっと出てきます。

なのに、例えば

「僕の宿題、手伝って」 っていう言いたい時に、なんて言うか。

これを文章にしてみようとする、ここから先はもう、  
長年の経験と勘が頼りです。

なんか、

help の後に my homework をこうくっつけて、

適当になんか単語を並べて・・

まあ適当に言ったら失礼ですけど。

これ、正しくは

**Help me with my homework.**

これにしか、ならないんです。

「私を宿題に関して手助けしてください」

という風な並びにしかありません。

ですから、これを

help 目的語 with ～ と考えてもよいですし、

help の後に「人」がきて、with の後に「その対象」がくる、

と覚えてもよいですし、

あるいは、

**Help me with my homework.** と、

文章そのまんまを覚えておくか。

いずれかの方法で覚えないと、そうなんです、

結局 **help** という単語を知らないことと同じになってしまうのですね。

非常に、もったいないことだと思うんです。

**help** という単語を初めて聞いて、  
あーなるほど「手伝う」って意味なのか・・・と折角知ったのに  
そこで止まってしまうと、先に進めない。

これあの、何語でもあることだと思いますけれど、  
日本語で言うなら、  
上の句が決まっていると、下の句が自然と決まってくる言い方、  
ありますでしょ。

あの、理屈から言うと、  
どの言葉とでも合いそうなんですけども、  
例えば、  
「笑いを」って言うと、後ろの言葉は決まってきますよね。

笑いを「流す」と普通言わないのであって、やっぱり、  
流す、とくれば「涙」ですね。

で、そういう風に、  
「前半・後半の決まり、約束事」みたいなものがあって、  
そこに着目すると、  
英語の理解って、さらに進むんだらうと思うんです。

今日は、そんな並びで  
**understand** っていう言葉を取り上げてみたいと思います。

例えば、  
「パーティーは7時にはじまると、理解していました」なんていう場合。

**I understood that the party started at seven.**

これ、大丈夫ですよ。

**I thought** ～ にしても、もちろん同じです。

さて、

**understand** の反対で、

**misunderstand** って言葉、ありますでしょ。「誤解する」

そこで、

「パーティーは7時にはじまると、誤解していた」と、こう言いたい場合。

「あっ、6時だったんですか！ 7時だと思っていましたよ」っていうケースですね。

**I misunderstood that the party started at seven.**

こう言えるかどうか、なんです。

一曲挟んで、考えてみましょう。

(今日の音楽 — サンタ・エスメラルダ「Don't let me be misunderstood」)

「Don't let me be misunderstood」

これ、「悲しき願い」と訳されておりますが、  
サンタ・エスメラルダでお聴き頂きました。

今日は **understand** という言葉と、

反対の **misunderstand** という言葉が、

同じように使えるかどうかという話なんですけども。

動詞って、後ろにぽんと単語がくる場合と、  
**that** 節 がくる場合と、ありますよね。

まあ、**that** 節 っていう言葉は知ってても、  
それがなんだかよく分からない、  
っていうのがあるかもしれませんけど。  
**that** 何々 のことですね。

その形を続けるなら、  
先ほどご紹介した通り、  
**I understood that the party started at seven.**  
「パーティーは7時にはじまると理解していました」  
この場合は、成立します。

**I misunderstood that the party started at seven.**  
こう言うかどうか、なんですよ。

これね、  
曖昧な響き、あるいは  
ぎこちない表現であろうと思います。

なぜかというと、  
**misunderstand** は、  
後ろにポンと単語がきた方が、まあどう言いますかね、  
据わり（すわり）がよいんですね。

ですから、例えば  
**I misunderstood you.**  
「君のこと誤解してたよ」  
**I misunderstood the time.**

「時間を取り違えていました」

こういう風な使い方をしますので、  
曖昧さ、ぎこちなさを避ける意味で言うと、  
ここは、2つ単語をつなげた方が良いでしょう。

**I misunderstood and thought the party started at seven.**

「私、誤解してましてね。パーティーは7時にはじまると思っていたんですよ」

この言い方であれば、誤解を生じません。

こちら辺は、あの、言葉の感覚ですから、

**I misunderstood that the party started at seven.**

これが「間違いですか、どうですか」と聞かれると、微妙なんですけど。

むしろ言葉って、

一瞬の違和感で通じなくなったりしますでしょ。

ですから、その違和感という意味であれば、

大いに違和感のある英語表現だと思います。

ただし、これもまた言葉の難しい所なんですけど、

**I misunderstood** の次に

セミコロン（;）として、

**the party started at seven.** と「書く」のであれば、

**I misunderstood; the party started at seven.**

こういう風を書くのであれば、これは、通じると思うんです。

あの、話し言葉と、書き言葉の違いが、こんな所にも表れます。

## ■ 「お久しぶり」は Long time no see...?

さて、お盆になります。

まあ学生さんは夏休みで数ヶ月ありますけれど、  
お盆の間に、一年ぶり、二年ぶり、もう何年ぶり～とって、  
「ああどうも、お久しぶりです」ってこと、よくありますでしょ。

さて、この「お久しぶりです」

これを英語でなんて言うかって聞くと、最近、

**Long time no see.**

という英語をおっしゃる方が多いんですね。

実はこの、**Long time no see.**

まあ、うーん、友達同士ぐらいの言い方で、  
非常に口語的な表現なんですね。

ですから、まあ、日本語でも

「よう、ひさしぶり！」 というケースと、  
「どうも、お久しぶりでございます」というのと、違いますよね。

この「どうも、お久しぶりでございます」 つまり、  
**Long time no see.** をきちんと言ったら、どうなるでしょう。

すると、「うーん」って考えだす人が多くて、  
これがあの、今の日本の・・・と言うと話は大きいんですけど、  
英語の状況というのは、ややここに集約されてる感じがあってですね。

本来であれば、「正しい」というか「正式の物言い」を覚えてから、  
余力があれば、その「カジュアル」な表現を覚える、というのが  
本来のことだと思うんですけど、

カジュアルの方だけ覚えて、  
「本筋はよくわかんない」っていうのは、これ、  
逆転してるんですね。

あの、前置き長いですけど、  
I haven't seen you for a long time. あるいは、  
It has been a long time since I saw you last.

これが、長ったらしいですけど、本来の英語表現なんですね。

で、これが縮まって縮まって  
Long time no see.  
になるわけです。

あの、こういうことってよくありましてね、  
カジュアルな表現の方が、まあ耳に留まりやすいということもありますし、  
カジュアルであるがゆえに使いやすい話しやすい、ってことがあるので、  
そっちが先に入ってくるんですね。

ただあの、人との会話って、言葉を変えないといけませんでしょ、当然。  
で、相手とのその立ち位置によって表現って当然変わるわけですから、  
Long time no see.  
これなんかを、あらゆる場面に使うと「危険」です。

あの、相手によっては、外国語だと分かっているけども、  
Hey! Long time no see!  
などと言うと、  
「なんと、失礼なやつだ！」と思う可能性は十分に考えられます。

まあ、そもそも Hey! はまずいですよね（笑）  
Hi! でないといけません。

これ、面白いことで、ですね。

例えば、見るからに外国人というか、  
金髪で、青い目で、白人、外国人だと分かってるんですよ。  
分かってるんですけど、その方が非常に乱暴な日本語を使うと、  
外国語だと分かっているけど、やっぱり、不快感を覚えるもんです。

これ、不思議なものでして、  
仮に、その方が意味を分かってなかったとしても、  
その言葉を聞いた瞬間に、  
すっと、こう、かすってくるんですね。

これは、ひっくり返せば同じことです。

我々のように、黄色人種で、アジア人だと、  
先方は当然分かってる訳ですけども、  
なれなれしい表現を使うと、やっぱり不快だろうなと思います。

あの、極端なことを言うと

**Long time no see.**

なんていう表現を知らなくても、

**I haven't seen you for a long time.**

という言い方だけでも十分です。

**I haven't seen you for a long time.** と言って、

「なんという、かしこまった物言い！ けしからん！」

と言って怒る人は、あまりいないと思うんで（笑）

あの～、丁寧すぎて不快になることは、  
まあない訳じゃないですけど、少ないです。

むしろ、妙に馴れ馴れしくて相手の感情を損ねることの方が大きいですし、それによって、まあ大げさに言うと、人格を疑われるみたいなどこ、ありますからね。

言葉って、あの、「通じりゃいい」ってもんでもないんですねこれ。面白いもんです。

特に、そうですね・・・

・・・お話長くなりますからこの辺にしましょう。

さて、「久しぶり」「お久しぶりです」という言葉から、他にも例えば、「久しぶりに雨が降った」なんて言い方しますよね。

「久しぶりに雨が降った」  
この「久しぶり」というのは、  
英語では、ちょっと説明的な物言いをしないとけません。

「はじめて」という言葉を使います。

「久しぶり」というのは、  
「数日間においてはじめて」と、こう言うわけです。

ですから、

**for the first time in many days.**

こうしますと、何日間かのうちではじめて、ということですので、「久しぶり」という意味になります。

**It rained for the first time in many days.**

こうなります。

あるいは、「お盆休みで久しぶりに昔の友達に会った」

**I met an old friend.**

この場合、たとえば3年と分かっていたら、

**for the first time in three years.**

といった言い方になります。

別の言い方すると、ちょっと堅いですけど

**after a long interval.**

という言い方もできます。

**interval** = 「間隔」です。

「長い間隔をあけた後に」 会いました。

まあこれで、「久しぶり」と言う日本語に当てはまるかと思います。

(今日の音楽)

さて、今日の「ワンポイント・イングリッシュ」は、

「お久しぶりです」という表現からはじまったんですけども。

**for the first time in two years.** と言うと

「二年ぶりで」ということですよ。

この **in** というのは、例えば、

**I'll be back in ten minutes.**

「10分たったら戻ってきます」の時の **in** ですね。

ところが、そうですね、例えば、

「フランスで2年間過ごして、久しぶりに、

まさに2年振りにフランスから帰ってきた」みたいな場合。

**He returned home** はよいですね。「家に戻ってきた」

**for the first time.**

その次なんですけどね、

**after two years in France.** になるんです。

フランスでの **two years** の後、  
その期間が経過した後、はじめて戻って来る。  
と、こうなる訳です。

同じようなことは、例えば、

「2年間アメリカに留学していて、帰ってくることになっている」  
みたいな場合。

**He will return home after studying two years in America.**

という言い方になります。

まあ、この辺些細なことですけど、

「久しぶり」という日本語が非常に便利な言葉であるのに対して、  
英語の場合はちょっと説明口調になる必要があります。

## ■ 強い確信をもって「彼女に会う」と言うには

前々回は「受け身」をやりまして、  
前回は「進行形」というのをやりました。

今回は、  
時を表す言い方、「時制」というのを、  
ちょっと考えてみようと思うんです。

英語の先生がよく、  
「間違いを恐れずに喋りましょう」とか「書きましょう」とか、  
いろいろ言いますでしょう。

あれは、半分正解で、半分違うんだと思うんですね。

あの、「間違い」には2種類あるんですね、英語って。

我々は、見た目が日本人ですし、  
一目瞭然「外国語を喋っている」ってということが分かりますよね。

なので、例えば  
**He like two book.** と言ったとしましょう。

「あっ、likes の s を言い忘れたんだな」とか、  
「two books の ”ス” を言わなかったんだな」とかいうのは、  
聞き手には予想ができて、  
間違いなんですけど、意味は通じますでしょ。

まあ、こういう間違いは、あんまり気にしなくてもいいんです。  
もちろん、ないに越したことはないんですけど、  
致命的ではありません。

それに対して、  
致命的なミスというのがあります。

「致命的」というのはどういうことかと言うと、  
通じないんです。

何を言っているのか全く分からない。  
先方がどれほど、斟酌をしてくれても  
意味が通じなくなってしまうか、誤解が発生するケース。

こういう間違いは、むしろ、  
怖がった方がよいんですね。

さて、その致命的なミス。

まあ、いくつかあるんですけど、  
その代表例が、実はこの「時制」というものなんです。

そもそもの話をすると  
我々日本人って、  
あんまり時制を気にして喋ることはないんですね。  
そもそも、  
そういう生活環境になかったということがあるだろうと思います。

で、  
現在形のようにありながら、ちょっと違ったり、  
過去形のようにありながら、実は現在完了形だったりする、  
そんな喋り方をよくしてるんですね、母語で。

これはやはり、日本語の特質だと思います。

ひとつ、例をあげると

「俺さあ、風邪ひいてたんだよ」って言った場合。

この方は、風邪はもう既に治ってますでしょう。

そう、お思いになる方は多いでしょうね。

つまり、

「風邪をひいていた」という言い方の中には、

「でも、今はもう治った」という含みが

あるだろうと思うんですよね。

で、そんな風に

日本語って非常に微妙なところで、

時制を取り替えてるんです。

英語は、違います。

やはり、そもそもを辿ると

狩猟民族の言語だったという所に行き着くんですけど、

「時制」を厳密に使い分けないと、おそらく、

エサの確保に関わったんだと思うんですね。

鹿がいた、のか、

鹿がいる、のか、

鹿が今来ている、のか、

さっきまでいた、のか、

きつとこっちに来る、なのか。

ちゃんと厳密に言わないと、

エサの獲得に関わるので、

それはもう、生死に関わる問題です。

なので、

時制というものを厳密に区別する必要があるって、

そこに、やはり言葉ですから、

含ませるものは、後の時代になってのってきた、と

こういうことが言えると思います。

今日はちょっと、

皆さんにお考え頂こうと思うんですけど。

「僕は、今夜、彼女に会う」という英語、

どんな英語が浮かぶでしょう。

数パターン、浮かびますでしょ。

一番簡単なのが

**I meet her tonight.**

ですよ。

でも、**tonight** ですから、未来の話だと考えると、

**I will meet her tonight.**

とも言えそうですよね。

**will** と言えるということは、

**I am going to meet her tonight.**

とも言えそう。

近い未来ですから。

**I'm meeting her tonight.**

とも言えそう。

あるいは、前回やった

**I will be meeting her tonight.**

以上、5パターン作れるんですね、これ。

まあ、他にも出来ますでしょうけど。

さて、この5つは、そうなんです、

5種類の「含み」があります。

それぞれ、彼女に会うと言っている、

この喋っている人の意識が、少しずつ違います。

曲の間にちょいとお考え頂きましょう。

(今日の音楽 - Dolly Parton 「I will always love you.」)

ご存じ、「I will always love you.」

今日は、ホイットニー・ヒューストンではなくて

ドリー・パートンでお聴き頂きました。

**I will love you. と**

**I love you.**

これ、もうお分かりですよ。

**I love you.**

の方が強いですよ、

先ほど

「今夜彼女に会う」というので、5つご紹介しました。

**I meet her tonight.**

**I will meet her tonight.**

**I am going to meet her tonight.**

**I'm meeting her tonight.**

**I will be meeting her tonight.**

さて。

**I will meet her tonight.** と

**I meet her tonight.**

これ、先ほどと同じですね。

**I will love you.**

**I love you.**

この場合と、同じです。

**I will meet her tonight.** は、

会おうって言っているだけです。

**I meet her tonight.** は

「彼女に会うのは、今夜だ」と言っていて、

これはもう変えられないんだ！と、言っている訳です。

ですから、こちらの方が強いんです。

実は、今ご紹介した5つの文章のうち、

確定度、確信度が一番高いのが

**I meet her tonight.**

一番低いのが、

**I will meet her tonight.**

なんです。

では、残りの3つはどうでしょう。

まず、

**I am going to meet her tonight.**

これ、あの、

そういう自分の計画だ、と言っています。

日本語で訳すなら「会うつもりです」

つもりはあくまでもつもりで、

いろんな事情で変わる可能性がありますでしょ。

ですから、これは弱いんです。

で、その次が、

**I'm meeting her tonight.**

これが、ちょうど真ん中ぐらいだと思うんですね。

「会う予定です」

そういう計画を立てています、くらいのところ。

もうひとつの

**I will be meeting her tonight.**

これ、前回ご紹介しましたが、

「will be ～ing」というのは、

形の上では未来進行形っていうんですけど、

この意味は、

「当然の成り行きとして、このままいけばそうなる」です。

その時にご紹介しましたが、あの、  
新幹線の停車駅のアナウンスで  
**We will be stopping at Kyoto.**  
っていう言い方をします。

新幹線は、このまま走っていけば、  
当然の成り行きとして次は京都駅に停まる。  
そういう言い方をしているんです。

ですから  
**I will be meeting her tonight.**  
これは、当然の成り行きとして彼女に今夜会う。  
つまり会うことになっている。

なので、確信度の高い順にいうと、

**I meet her tonight.**  
**I will be meeting her tonight.**  
**I'm meeting her tonight.**  
**I am going to meet her tonight.**  
**I will meet her tonight.**

こういう順番になろうかと思います。

## ● おわりに

最後まで読んでいただいて、ありがとうございました。  
なにかしら、あなたのお役に立つことが転がっていたとしたら、  
大変うれしく思います。

ご意見・ご感想などもお知らせいただけたら、嬉しいです。

さて、この無料レポートの内容は、すべて  
私の発行するメールマガジンのバックナンバーです。

珠玉の「ワンポイント・イングリッシュ」－京都から  
<http://www.mag2.com/m/0000269406.html>

このレポートを「面白いな！」と思って下さったら、  
メールマガジンも「面白い」と思います。(笑)  
無料で読んでいただけますし、いつでも自由に解除できますので、  
ぜひ、お読み下されば幸いです。

あなたとの出会いに、感謝いたします。  
願わくば、メールマガジンで再会できますことを！

えいいち  
[the\\_lake\\_poets@yahoo.co.jp](mailto:the_lake_poets@yahoo.co.jp)